

教員氏名： 鎌水 浩（教育学科・児童教育専攻／教授）

## 1. 教育の責任（何を行っているのか）

育英大学教育学部教育学科児童教育専攻所属の教員として、大学4年間の学修の骨格を形成するともいえる基礎教育科目及び小学校から中学校、高等学校保健体育教員免許状取得に必要な専門教育科目を担当している。

具体的には基礎教育科目では、「自己管理と社会規範」「他者理解と信頼関係」及び全学年のゼミを、専門教育科目では基幹科目としても位置付けられている「道德教育論」及び教職科目としての「道德の指導法」「総合的な学習(探究)の時間の指導法」を担当している。

（添付資料1参照）

〈主な担当科目〉

| 科目区分   | 担当科目名             | 必修・選択・自由科目の別 | 配当年次 |
|--------|-------------------|--------------|------|
| 基礎教育科目 | 自己管理と社会規範         | 卒業必修         | 1年次  |
| 基礎教育科目 | 他者理解と信頼関係         | 卒業必修         | 1年次  |
| 専門教育科目 | 道德教育論             | 卒業教免必修       | 1年次  |
| 専門教育科目 | 道德の指導法            | 教免必修         | 2年次  |
| 専門教育科目 | 総合的な学習(探究)の時間の指導法 | 教免必修         | 3年次  |

## 2. 教育の理念（なぜ行っているのか）

### (1) これからの大学教育に求められるものは何か

かつての大学教育の意義は国家や産業を支え、さらに発展させていく有意な人材を育成していくことであった。だが今日の情勢というのは、例えば容易に憎悪と対立を生む社会の分断や、通常的生活を送れなくなるほどの夏の酷暑に端的にあらわれているように世界規模、地球規模での問題が深刻化している。この状況を踏まえれば、国家や産業といった従来の枠組みを超えるような英知が求められているとあってよい。

こうした中、現在の大学教育においてはどのようなような教育成果が求められるのだろうか。それを一言で表すならば「道德的調整力」であろう。これは量的拡大を企図する生産原理や、一層の合理性を追求する新たな知見よりも、既存の技術や知識をいかに組み合わせれば、人間一人一人の個性を尊重し、同時に人々の融和が図ることができる

かということを追究し実現していく力ということになる。こうした力を備えた人材を社会に輩出し、その各所においてリーダーとして地に足のついた活動をさせていくことこそが、これからの大学教育に求められることであろう。教育学部は学校教育の場で児童生徒を指導する教員を養成する教育機関であることから、特にこのことがあてはまることになる。教育こそが社会を変えていく原動力になるからである。

## (2) 学生に対する教授の理念

端的に述べれば「人間としての教授」である。単に知識を得るというのであれば、現在ではインターネットを利用すればいくらでも可能である。だが、このような方法で学ぶ機会をつくったところで、決して生きた知識とはならない。学ぶ者の本質的なニーズに対応できないからである。本来的に教授する側は、その学生がなぜ大学で学ぶことを志望したのか、またこれまでどのような道をたどってきたのかといったことを理解した上で、内容や教え方を調整していくことが求められる。そのような配慮があってこそ、学生としては学ぶ目的観が培われ意欲が醸成されるはずである。そのためには機械的に講義を行うのではなく、学生の状況を把握する洞察力と、それに応じた教授法を臨機応変に選択できる、いわゆる引き出しの多さが必要となってくる。大学教員にはこのような「人間としての教授」を可能にする指導力が必須となるのである。

## 3. 教育の方法（どのように行っているのか）

### (1) 教員と学生間の双方向型授業

前項でも述べたように授業においては一方向の機械的な講義となってはならない。そこで重要なのは教員と学生がコミュニケーションを図りながら展開する双方向の授業である。だが特に受講者が多数になるとそれを行うのは難しく、報告者の授業では基礎教育科目でいずれも170人を優に超えているのが実際である。そこでこのような場合には、ゼミも活用した授業方法を用いている。具体的には授業中にその内容に即して3つ程度の課題を示し、それについて、あらかじめ座席位置を指定したゼミごとに回答を検討させる。そして、リアクションペーパーに各メンバーの意見をまとめ発表させるという方法である。これにより教員と学生間のみならずゼミ内の学生同士もコミュニケーションをとりながら授業を進めるということが可能になる。(添付資料2参照)

以下授業評価アンケートでの、この点についての自由記述を何点か挙げる。(原文ママ、

添付資料 3 参照)

- ・自己管理と社会規範は、ゼミ内のコミュニケーションを取る機会が多くて、毎回の授業がとてもためになりました。自分の考えを述べるだけでなく、周りの意見を聞いて考え直すこともあったので、意見を出し合うことは大切なことだと感じました。
- ・自分たちで考えたことを発表する授業は初めてで面白かった。意見を言ったり聞いたりすることの大切さが勉強になりました。
- ・ゼミで学ぶと言う発想が素晴らしかったとおもいます。集団で考えることを学びました。
- ・よかった点はグループ内で意見を出したり聞いたりする機会が増えて助かったことです。他の授業ではあまりグループの討論がなかったので話し合うことがなく話す機会がなかった。
- ・無駄話が少なかったので集中できた。ゼミごとでの話あいも多く、これから先の活動にも役に立つとおもう。

この方式について否定的な意見を述べる学生は見当たらない。学生にとっても良い機会となっているようだ。

## (2) ICT の活用と留意点

コロナ禍によって一気に ICT 機器の活用が大学に限らず各学校種で進められたのは周知の通りである。このことによって例えばパンデミックや災害の影響で学生が登学できない場合にも、リモートで授業を行うことが容易に可能となった。また通常の授業においても学生がやむを得ない理由で欠席せざるを得ない場合、授業内容を個別にオンデマンドで提供することもできるようになった。このように何らかの理由で通常の授業に支障が生じるような場合でも、一定の内容を無理なく保証することができるようになったことは、授業を行う上での大きな進歩ということになる。ただし前項でも述べたように、ICT の安易な活用は機械的な知識伝達にもつながりかねないので、あくまでも対面の授業が基本であり、ICT は補助的な役割を担うものであるとの認識を持つべきだろう。むしろ通常の授業の中でその技術は積極的に取り入れるべきだろう。

具体的には学生のスマホを活用し、教員が授業の中で提示した課題について、アプリを

用いてそれに対する回答や意見をその場で集約するといったことである。こうすることで一方的な講義とならず、教員と学生双方向の授業とすることができる。これは一つの例だが、その他様々な工夫も考えられるだろう。こうした授業改善を常に図っていく熱意と努力を惜しむべきではない。

#### 4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

上述したように報告者の授業では知識の修得は当然としながらも授業で取り扱った課題に対する関心を持ち、解決への方途に向けての考察を行うことに力点を置いている。そのため授業ごとのリアクションペーパーやレポート、定期試験の解答も全て記述式としている。さらにレポートにおいては例えば「スマホ等の依存症について、自身の身近なできごとと関連させた上で、その危険性を指摘し、考えられる改善の方法を述べよ」といったように必ず学生自身の経験を取り入れさせる形をとっている。安易にネット記事等のコピペができないようにするということもあるが、自分自身と向き合わせるといった機会を多少なりとも設定し、少しでも関心を高め独自の考察を可能にするためである。この学修成果を数値であらわすのは難しいが、各レポートを見てみると、それぞれの学生が実に真摯な姿勢で臨んでいるということがよく分かる。内容としてはレポートの構成形式に則った上で、学生自身のこれまでの人生経験など基づいて考察を加えられているため、個々の学生理解につながるのはもちろんのこと、中にはナラティブとして感動的ですからあるものも存在する。

以下、授業評価アンケートにおける自由記述を何点か挙げる。（原文ママ、添付資料3参照）

- ・内容が難しいと感じる時もあったが、先生やゼミの人の力を借りて遂行することが出来た。自分たちの興味のある分野のニュースを取り扱う授業は社会のことを考える良い機会になった。
- ・ゼミの人たちと協力してニュースなどについて考えることが出来た。
- ・レポートを書くのは難しかったけど少しずつ慣れることが出来ました。
- ・講義の最後の方にやった最近起こった問題をまとめる講義はためになった。
- ・レポートで自分の意見などをまとめたり、ゼミでの発表でみんなの意見を聞いたりできた。

- ・ 人類の祖先の進化の過程、それに伴った生活の変化など、これまでに学ぶことの少なかった分野について知ることができ非常に自分の知識の成長に繋がったと思います。その分設問も難しいことが多く、中々時間内に書くことができないこともあったが、その後で十分に他の人の答えを聞く時間もあり、授業の終わりには疑問に思うことなく授業が終わるのでとても良かったです。

もちろん授業全般において全てが肯定的なものというわけではないが、ゼミごとに検討するという方法も含めて、関心を持ち考察するということについては一定程度は成果を出すことができているといえるだろう。

## 5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

### (1) 現状における課題

授業での課題として挙げられるのは、授業の一層の活性化を図る必要があるということである。一般的に日本の学生は授業においては受け身の姿勢で臨むことが多く、各学生の意見や考えを積極的に述べるという場面は少ない。上述したような今日的な大学教育の重要性を踏まえるならば例えば「サンデル教授の白熱教室」のように、提示した課題にたいして熱を帯びた議論をしていきたいものである。残念ながら現状では学生の意見を吸い上げるという作業は行っているものの、「白熱」からは程遠いのが実態である。そのためには受講者をほどよい人数とし、なるべくマイクを使わずに肉声で授業を展開できるような配慮が必要かもしれない。いずれにしても様々な対応を試行して「白熱化」を目指したい。

### (2) 今後の目標

今後の目標として挙げられるのは、前項で述べたように授業の活性化の延長ともなることだが、「より深い考察」を促すことである。現状では地球的な課題があるにしても、正常性バイアスの如く我々の生活で直接深刻な影響が出てくるようにならないと、危機感というのはなかなか感じられないものである。考察のための考察ではなく、現状の課題を解決していくための考察という意識を、様々な方法を駆使して持たせていきたい。

**【添付資料】** ※全部又は一部の現物を省略しています。

#### 1 令和6年度教育課程表

- 2 リアクションペーパーサンプル
- 3 令和5年度授業評価アンケート自由記述

(2024年8月31日現在)